



Fig. 1 ステレオスコープ(立体鏡)とステレオ写真集

画像からくり



口絵解説

「画像からくり」

第1回 ステレオスコープ（立体鏡）とステレオ写真集

桑山哲郎

これは、1990年ごろ復刻版として販売されたステレオ写真集である。木製専用収納ケース、木製ステレオスコープ（立体鏡）そしてステレオ写真がセットとなっている。企画・製造は（株）トーアフォート【名古屋・東京】で、“ステレオ（立体）写真集「明治ジャパン」”がセットの商品名になっている。

ステレオスコープは、木製で分解して収納ケースに収めることができる。光学系は新規に設計したとのことで、接眼レンズの間隔が短く（62mm）大変見やすい。ステレオ写真は、明治時代に販売されていた商品を複製し、セピア調色のプリントとしている。このセットでは、“風景編”48組、“風俗編”48組、“日露戦争編”18組の合計114組が収納ケースに収められている。この写真集と同時に別なステレオ写真集も発売された。掲載の写真では“明治の元勳編”に含まれている乃木希典のステレオ写真をセットしている。

口絵写真の連載の代替わりについて

編集委員長 久下謙一

甲田謙一氏による口絵写真「失われたフィルム」の連載は、72巻1号で終了しました。お気にいっていただけたでしょうか。ここに掲載した写真は日本写真学会のホームページのギャラリーのページ (<http://www.spstj.org/gallery/ichiran.html>) にも掲載しています。そちらもご覧ください。

2号からは桑山哲郎氏による「画像からくり」シリーズをお送りします。最近3D画像がちょっとしたブームですが、3Dに限らず画像を使ったからくりが昔からいろいろあります。そのなかから幾つか選んで、画像のからくり仕掛けをこれから写真で紹介していきます。ご期待ください。

口絵写真「失われたフィルム」の連載終了に寄せて

甲田謙一

写真学会誌・口絵タイトル一覧

第1回	126 フィルム (インスタマチック)	2009年 第2号
第2回	ディスクフィルム	2009年 第3号
第5回	127 フィルム	2009年 第4号
第3回	コダック PR10 インスタントフィルム	2009年 第5号
第4回	110 フィルム (ポケットインスタマチック)	2009年 第6号
第6回	16 mm フィルム	2010年 第1号

写真学会誌の昨年度第2号から1年間、「失われたフィルム」と題して連載を行った。古い時代には様々なサイズのフィルムが生産され、カメラの進歩という時代の流れもあって、世の中から消え去ってきた。

今回対象にしたフィルムは、私が写真を始めて以降に生産が終了したものである。ただ、生産終了というのも条件が難しく、マイナーなヨーロッパのメーカーなどで細々と続く場合もある。特に裏紙付きのロールフィルムは、既存のフィルムを裁断してスプールに巻きなおして販売されるものもある。だから、完全に入手不能になったと断言することは、コダック PR10 インスタントフィルム以外では困難である。

フィルムの性能向上は、古くはコダックとアグファ、1960年以降には富士フィルム、コニカの国産2社が加わって、熾烈な戦いを繰り広げてきた。しかし、デジタルカメラの出現以後、事実上アグファとコニカが撤退し、コダックと富士フィルムだけが新たなフィルムの開発能力を持つ状態になった。だが、今後新フォーマットのフィルムが出現する可能性はなく、現状のフィルムも35mm以外、生き残る可能性は非常に低い。

クラシックカメラがブームになって久しい。特に全てが機械式のクラシックカメラは、手先が器用な人なら部品の損傷がなければ復元することが可能な機種も多数存在する。とはいえ機械的には動作をしても、フィルムがなくては単なる飾り物になってしまう。銀塩カメラは、フィルムがあって初めてカメラなのである。

フィルムは生ものだから、使用期限を過ぎれば捨てられる。実は今回の連載に使ったフィルムも、古くなったフィルムを手に入れることにカメラ以上に苦労した。第二次大戦以前に消滅したフィルムの現物を見る機会がほとんどないのは、「生もの」というフィルムの持つ特殊な性格によるわけである。

逆に言うと最新のフィルムが使える銀塩カメラは、機能さえ確実なら何年前のものでも実用になる。私の手元にある最も古い実用機は、1934年生まれのコダック・レチナである。コダックが35mmフィルムを普及させるためにパトローネ入りフィルムの発売と同時に製品化したカメラだが、連載に登場したカメラ達とは違って、まだ生き長らえることだろう。

銀塩写真は、多くの人々が大量のフィルムとプリントを消費することが前提である。デジタル時代になれば、大規模な写真産業の上に成り立っていたフィルムも不要になり、生産量が縮小して、過去の消え去ったフィルムのように全てが消滅するのも遠い将来とは言えない。富士フィルムが8mm映画フィルムを生産設備の老朽化を理由に生産停止を宣言した。だが、多くの映画人達の要請で、設備が稼動する間だけ生産続行することになった。これと同じことがスチルフィルムで何時起きるのだろう。

人によってはヨーロッパのマイナーメーカーが細々と続けるということもある。それらの現状を見ると、最新の技術を持つ大メーカーの数十年前の製品と言っても良い水準のものである。銀塩写真という文化を守るために、コダックと富士フィルムには生産を続けていただきたい。